

F.Chopin の Autograph (自筆楽譜) および
Facsimilé (筆写楽譜) についての研究：
パリ音楽院図書館・フランス国民図書館音楽部なら
びに我が前田家所蔵本

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川口, 恒子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47680

F.Chopin の Autographe (自筆楽譜) および Facsimilé(筆写楽譜) についての研究*

——パリ音楽院図書館・フランス国民図書館音楽部

ならびに我が前田家所蔵本——

川 口 恒 子

1

パリ音楽院図書館所蔵の自筆楽譜原稿は、1962年には特別の許可をえて直接16区にあるルーム街コンセルバトアールの図書閲覧室で調査した。また1970年および1973年に出向したときは、2区のリシュリュー街にあるフランス国民図書館別館⁽¹⁾においてコンセルバトアールから寄託された自筆楽譜や筆写譜を、コンセルバトアール当局の許可をえて調査することが出来た。

フレデリック・ショパン (Frederic François Chopin 1810—1849) がなくなってから、すでに125年も経過し、その間転々と人手にかかっているため自筆楽譜もいたみが激しく、今日実物を大切に厳重に保管している理由もうなづけるのである。バッハ (Johann Sebastian Bach 1685—1750) の場合はもっと時代が古いにもかかわらず、大英博物館の平均律クラヴィーア曲集は、しっかりと見事に整本されており、筆跡も黒々と立派であった。用いた料紙やペンやインクの違い、それに20人も子供をつくったドイツの楽聖と、胸の病に若くしてパリの亡命さきでなくなったポーランドの天才との性格や体質などの相違も反映するのであろうか。

イギリスへ渡ったヘンデル (Georg Friedrich Händel 1685—1759) が一つの作品について筆写譜を二部ずつ作成させていたことはよく知られている事実であるが、ショパンも作品が完成

すると自筆楽譜をもとにして二つのコピーをつくらせていたようである。

1970年3月小田急百貨店で、ポーランドの国宝海外初公開—ピアノの楽聖—大ショパン展が、毎日新聞社と日本ショパン協会の主催で開催された。自筆楽譜・筆写楽譜・初版本・写真・手紙などが出陳され、その壮観は人々の眼をおどろかせたのである。さてその中に日本から特別出品されていたのは、前田家所蔵のマズルカの筆写楽譜とショパン自筆の書簡でした。昭和のはじめに故前田利為侯爵が英国大使館付武官としてロンドンに在任中、自らもピアノを弾かれた音楽好きの菊子夫人のために、ロンドンの古書籍商マグズ・ブラザーズ商会を通じて、ヨーロッパ各地の競売などに広く手をのばして買い集められたものである。このマズルカ (作品33の3番・ハ長調) は1830年以来行方不明になっていたものであるが、1966年東京の旧前田侯爵家のコレクションの中にあるのが発見されたのである。日本へもち帰られていたためヨーロッパの戦火を免れることが出来たのである。ショパンの友人フォンタナ (Julian Fontana)⁽¹⁾⁽²⁾ が写譜したもので、フランス版の出版にあたりショパン自身の手で上部に No. 2 と記入してシュレジンガー社に送られていたものである。しかしその後ドイツ版を出版するにあたり、曲の順序を組みかえて、現在のようにこのハ長調は第3番におかれるようになった。自筆ではないが出版楽譜と比較しているいろの

*昭和49年9月17日受理

違いが発見され貴重な資料である。手紙は簡単なものであるが、ポーランド・ショパン協会編の書簡集にもアーサー・ヘドレイ氏 (Arther Hedley)⁽¹³⁾編集の書簡集にもものっておらず、全く新しい書簡資料が日本で発見されたことになるのである。〔Fig. II〕

さて、ショパンの自筆楽譜の所在は戦前はかなり確実にわかっていたようだが第二次大戦後、戦火に焼失したもの、行方不明になったもの、所有者が変わってしまったものなどが続出した。フランスの名ピアニストのアルフレッド・コルトー (Alfred Cortot 1877—1962)⁽¹⁴⁾の有名なコレクションも、彼の死後大部分がアメリカに売られてしまったということである。

1927年、第1回ショパンコンクールがワルシャワで開かれた時から、ポーランドは国をあげてショパンの音楽遺産を守ることにつとめ、ヨーロッパに散逸しているショパンの自筆原稿を出来るだけ買いもどした。ショパンの自筆原稿を多く所有しているブライトコップ社からも莫大な金をはらって買いとったのである。しかるにナチス・ドイツの電撃作戦で国中が焼け野原になってしまった。ポーランド人は国宝級の文化財を守るため、開戦時ドイツ軍の急進の合間にほんの数日のうち、必死に荷造りしてカナダに疎開した。1958年疎開されていた文化財は、カナダ政府よりそっくりポーランドに送り返された。ブライトコップ社から買いもどしたショパンの自筆楽譜もその中にあり、無事にもどったわけである。一方、ショパンが彼の半生を過したフランスでは、パリのコンセルバトワールの図書館に重要な作品をふくむ自筆楽譜十数篇が大切に保管されているのである。

2

私が実際に見たショパンの自筆楽譜は、およそ二種に大別される。

- I 訂正のないもの。即ち、ペダルや細かい発想記号などの書入れのないもの。
- II 楽想を書きつけた初稿楽譜、即ち、書い

たり消したり、ペダルをはじめ、細くいろいろ書きこみをしてあるもの。

いづれも細いペン先で符頭は小さく、符尾も時には髪の毛を思わせるように繊細な線でさつと書かれている。2分音符はひらがなの「こ」の字をかくように、上半分、下半分と二度に書いたものが多い。ペダルを踏むところは ped. と書き、ペダルをはなすところは丸に十の字を合せたような記号 \oplus を書いているのが、一目でわかる特徴である。インクの色は年月のために色あせて、時には茶色に近く変色している部分も見られる。

自筆楽譜 I の例として、ワルツ作品 64 の 1、自筆楽譜 II の例として、スケルツォ作品 31、筆写楽譜の例としてマズルカ作品 33 の 3 を、出版楽譜と照合しようと思う。

略語 Autographe = aut.

Facsimile = fac.

Paderewski版 = P.

Mikuli版 = M.

Kreutzer版 = K. Scholtz版 = S.

Debussy版 = D. 井口版 = I.

Augener版 = E.

小節 = Bar 右手 = R. H. 左手 = L. H.

Valse. Des-dur Op. 64 No. 1〔Fig. III〕

(普通 "小犬のワルツ" と愛称される。)

献呈 デルフィーネ・ポトッカ伯爵夫人
(A Madam la Comtesse Delphine Potocka)

パリ音楽院図書館所蔵 Ms. 111B(第二稿)

五線紙は横 25.4cm, 縦 15.5cm, 五線は八段。

五線の上のあき 1.5cm 下のあき 1.0cm

右のあき 2.4cm 左のあき 1.8cm

五線の長さ 20.8cm 五線の巾 7.5cm

五線と五線の間隔 0.9cm~1.0cm

Ms. 111B は最初に Vivace と書かれているが、他の出版楽譜はすべて Molto vivace となっている。

Bars 13—14 R.H.aut. と出版楽譜と違っている。

- Bars 21—23 L.H. aut. 1 拍は附点二分音符。出版楽譜は四分音符で aut. よりオクターブ低い。したがって 2 拍・3 拍も異っている。
- Bar 21 aut. はここに *leggiero* と書かれているが、他は Bar 1. になっている。
- Bar 24 L.H. 1 拍他は aut. よりオクターブ低い。2 拍 aut. は f. as 他は as. f である。
- Bar 25 L.H. 2 拍の和音が異なる。他は b. es.
- Bar 28 L.H. 2 拍 3 拍が異なる。他は as. des. f. 四分休符となっている。
- Bars 29—31 Bars 21—23 と反対に他は aut. よりオクターブ高く、1 拍は附点二分音符になっている。したがって 2, 3 拍も異っている。
- Bar 32 L.H. 1 拍 aut. より他はオクターブ高く、2 拍も f. as になっている。
- Bar 33 L.H. 1 拍他は aut. よりオクターブ高い。
- Bar 36 L.H. 1 拍他は aut. よりオクターブ高い。
- Bar 37 R.H. 3 拍タイがついていない。
- Bar 41 R.H. 1 拍附点二分音符他は二分音符である。
- Bar 42 R.H. 1 拍他は Bar 41 の 3 拍からタイがついている。
- Bar 51 L.H. 1 拍他はオクターブ低い。
- Bar 54 R.H. aut. はここから装飾音がつくが、他は Bar 55 からついている。L.H. 1 拍 aut. は as 他は c, 2, 3 拍は他は aut. から c をとりのぞいている。

- Bar 55 L.H. aut. だけ 1 拍も和音である。
- Bar 61 L.H. 1 拍 aut. は as 他は f である。
- Bar 62 L.H. 1 拍 aut. のみ四分音符、他は附点二分音符である。
- Bar 64 L.H. 1 拍 aut. は des, 他は ces で異なる。2・3 拍も違っている。
- Bar 65 R.H. 1 拍 aut. は二分音符、3 拍は四分音符であるが他は附点二分音符である。L.H. も 2・3 拍異っている。
- Bar 68 L.H. 1 拍 aut. は四分音符であるが、他は二分音符である。
- Bar 77 aut. はこの小節まで書かれている。

複縦線のところに *dal Segno al fine* とかかれている。Bar 5 にもどり Bar 36 の 2 拍で曲を終わることになっている。(説明中、「他は」と書いたところは出版楽譜全体をさすのである。)

はじめはこのように単純な形であったが、ショパンは推敲を重ね、中間部 *Sostenuto* のところの旋律にタイをつけることによりシンコペーションでより複雑な美しさを出している。さらに Bars 21—36 までを追加し、最後はオクターブ高くから下降して、よりピアノスティックな効果を出すこととなったのである。この曲は版による違いは殆どみとめられないが、私が目を通したところでは、Bar 1 の 1 拍の上に *tr* をつけているのは、パデレフスキー版だけである。

Scherzo. b-moll op. 31 [Fig. IV]

献呈 アデル・ド・フェルステンシュタイン伯爵令嬢 (A Mademoiselle la Comtesse Adèle de Fütstenstein)

パリ音楽院図書館所蔵 Ms. 106.

五線紙は横長の十二段のものを使用する。

- Bars 1—5 R.H. ヘ音記号とト音記号とに
またがって書かれている。
- Bar 9 第1拍 aut. = • M. =
- Bar 63 aut. K. = 何も書かれていない。
M. P. I. = Poco riten.
D.E. = poco rit.
- Bar 71 R.H. E. = Arpeggio
aut. etc. = ない。
- Bar 72 R.H. K. = Arpeggio
aut. etc. = ない。
- Bar 73 R.H. aut. M.P.K. = 短前打音,
D.I. = 複前打音。
E = Arpeggio.
- Bar 80 R.H. E. = Arpeggio,
aut. etc. = ない。
- Bar 97 R.H. aut. P.D.I. = Arpeggio
M.E. = Bar 96 の三拍とタイ
で結ばれている。ない。
K. = ない。
- Bars 97—99 L.H. aut. M.P.D.E.I. = 1 拍附
点二分音符。K. = 八分音符。
- Bar 114 aut. P. = *ff* K.I. =>
M. D. = dim. E. = *piu f*
- Bar 117 M.D.E.I. = *ff* K. = *f*
aut. P. = ない。
- Bar 132 aut. P.M. = P. K.I. = PP
M.E. (D.) = sotto voce
- Bar 181 L.H. E. = 1 拍 Arpeggio
aut. etc. = ない。
- Bars 203—205 Bars 71—73 と同じである。
- Bar 211 R.H. E. = Arpeggio
aut. etc. = ない。
- Bar 229 R.H. P.D.I. = Arpeggio
aut. M.K.E. = ない。
- Bar 233 R.H. E. = 1 拍附点四分音符。
aut. etc. = ges. as は二分音符。
- Bar 258 D.K.E.I. = cresc.
Aut. P.M. = ない。
- Bar 265 R.H. M.K.D.I.E. = cis タイが次
の小節へとかかっている。
- Bar 268 R.H. aut. P.M.K.I. = d 四分音
符 cis 四分音符。D.E. = d 附点
四分音符 cis 八分音符。
- Bar 269 Bar 265 と同じである。
- Bar 285 K. = Bar 265 と同じである。
aut. etc. = L.H. 下の as がない。
R.H. は K. と同じ。
- Bar 288 R.H. D. = 2 拍附点四分音符。
aut. etc. = 附点はない。
- Bar 318 L.H. 2 拍 aut. P.E. = fis
M.K.D.I. = a
- Bar 326 L.H. 3 拍 M. = gis. aut. etc. = fis
- Bar 369 R.H. 2 拍 E. = 四分音符。
aut. etc. = 附点。
- Bar 390 R.H. Bar 369 と同じ。
- Bar 394 R.H. 2 拍 E.M.D.K.I. = 附点。
aut. P. = 四分音符。
- Bar 411 R.H. 1 拍 aut. M. P. = 四分音
符。D.K. E. I. = 八分音符。
- Bar 419 L.H. h E.I. = 四分音符と附点
二分音符。aut. etc. = 四分音符
だけである。
- Bars 503—507 L.H. 1 拍 aut. P.M.K. = 四分
音符と附点二分音符。D.E.
I. = 附点二分音符だけである。
- Bar 544 aut. だけ Sempre con fuoco
の書き入れがない。
- Bar 557 aut. = 両手とも Arpeggio がな
い。
- Bar 562 aut. = 同上
- Bar 564 aut. = 同上
- Bar 568 aut. M.P. = 同上
- Bar 570 aut. M.P. = 同上
- Bar 572 aut. M.P. = 同上
- Bars 553—572 多くの版は両手とも Arpe-
ggio
- Bars 553—560 M. = L.H. から R.H. へ続い

- た Arpeggio 但し Bar 554 だけついていない。
- Bars 553—572 K. = Arpeggio は L. H. だけで R. H. にはついていない。
- Bars 581 M. E. I. = PP.
aut. P. D. K. = ない。
- Bar 716, 720 L. H. aut. P. = 2 拍より次の小節へスラー
M. D. E. I. = 2 拍より 3 拍へスラー。K. = スラーない。
- Bars 748—755 M. = 1 拍から 3 拍へスラー。
aut. P. D. K. = スラーはない。
E. I. = スラーはないが、Bar 748 は前のフレーズに入る。
Bar 749 から 2 小節づつのスラーをつけている。
- Bar 780 R. H. aut. K. P. D. = 短前打音からオクターブ上の記号つけている。E. = 短前打音はオクターブ上に書いてあるので音としては aut. と同じ。M. I. = 本音符だけオクターブ上。L. H. K. E. = 短前打音に Arpeggio が

aut. だと右手の跳躍は 10 度であるが M. だと 2 オクターブをこえることになる。したがって演奏は多少むつかしくなるが、派手な効果を得られるので、たいていのピアニストは M. のように弾いているようである。

Mazurka c-dur op. 33 No. 3 [Fig. I]

献呈 ローザ・モストヴスカ伯爵令嬢
(A mademoiselle la comtesse Mostowska)

前田家所蔵 筆写楽譜 (facsimile)
コピスト Julian Fontana

(最初の第 3 拍より始る g の音は、普通小節として数えないので、次の小節をもって Bar 1 とする。)

- Bar 1 R. H. 3 拍半の八分音符はナチュラルがついていない。
- Bar 8 R. H. 十六分音符にシャープがついているようだが、或はナチュラルであらうか判読しにくい。
- Bar 11 R. H. 3 拍半の八分音符は何もついていない。Bar 2 と同じである。
- Bar 14 R. H. 2 拍の二分音符はナチュラルついていない。
- Bar 15 R. H. 十六分音符にシャープがついて dis のようである。
- Bar 26 R. H. 2 拍はフラットがついていないから d であらうか。
- Bar 28 R. H. 3 拍 S. = 次の小節の第 1 拍へタイがついている。他の版は fac. と同じである。
- Bar 29 R. H. 3 拍半にフラットがついていないので e であらうか。
- Bar 32 R. H. 複前打音 P. = c がない。fac. M. S. I. = 同じである。(c がある。)
- Bar 33 ここまでで fac. は終わっている。複絢線の下に Dal Segno al fine とかかかれている。Bar 2 にもどり Bar 16 の二拍で fine になる。

3

小犬のワルツの自筆楽譜からは曲が次第に形をととのえてゆく姿を見ることが出来たし、変口短調のスケルツォの自筆楽譜からは演奏上の秘訣を学べたように思う。cresc. dim. の記号を消したり書いたり、スラーも消してはなおし、推敲のあとがうかがえる。ペダルも彼が自ら書き入れたものは独特の効果が出るようで、ショパンがすぐれたピアニストであり、彼の作品の演奏にあたってペダルの効果が如何に重要であるかを思いしらされたのである。また彼の手が

非常に柔軟でよくのびたということも、特に広い音域にわたるパッセージなどから察せられる。自筆楽譜に接することはとりもなおさず作曲者のいぶきにじかにふれる思いである。繊細なペンの筆跡の一つ一つから、まるで電磁波でも発するようにいたいように伝ってくる。

曲の演奏にあたって多くの版が出ているが、それを間違いなく判断するためには自筆楽譜の研究が第一であり、その他、筆写譜、初版本なども重要な参考資料である。出版楽譜もいろいろあり、ドビュッシーの校訂のものや、コルトーの版、戦時中龍吟社から出たクロイツァー版などはそれぞれ独特のショパン解釈で面白く、フレーズのきり方やペルダルなど参考になることが多い。しかし校訂者の主観が多いのでそのままとり入れるわけにはゆかない。それでは初版はというとブライトコップ社 (Breitkopf & Hartel, Leipzig) シュレサンジェ社 (Schlesinger, Paris) などであるが、ショパンが最も多く自稿を送ったといわれるブライトコップの初版ですら自筆楽譜との相違がある。今日のように校正が行われなかったのであろうか。ロンドンのウェスル社は (Wessel & Co) 作品 31 のスケルツォに “Le Meditation” と標題をつけて売り出したようである。標題のきれいなショ

パンが怒った顔が想像出来るようである。フレーズ・フィガリング、ダイナミック記号など他人の手が勝手に加わることが多かった模様である。

筆写楽譜も自筆楽譜と違っていることも多いようである。人の手による筆写には誤写や誤脱は免れない。つまりあらゆる意味において最高のものこそ自筆楽譜である。しかし、例えば作品 31 のスケルツォの *Sostenuto* の部分 (Bars 265—309・Bars 366—411) でショパンが附点を忘れたのか、それともわざわざ変化させたのか、なかなか判断に苦しむ。アルペジオの部分 (Bars 553—572) にしても、比較的自稿に忠実なクラクフ版 (P.) にしても、ショパンの弟子のミクリ版 (M.)⁽¹⁵⁾ にしても異っている。ショパンは推敲を重ねる人であるから、初稿と最終稿では随分違いが出ることも考えられる。従って如何に演奏するかはそれらをよく吟味して作曲者のめざすところのものを正しく解釈して表現出来るように自ら取捨選択すべきである。ゴドフスキー (Godowsky)⁽¹⁶⁾ がショパンの簡単なワルツを弾くために、自室のピアノの上には十数冊の異った版をのせていたということである。

参 考 文 献

Chopin	Waltzes (Paderewski)	Instytut Fryderyka Chopina Polskie wydawnictwo Muzyczen
”	scherzos (”)	”
”	Mazurkas (”)	”
”	Waltzes (Mikuli)	Schirmer
”	Scherzi ”	”
”	Mazurkas ”	”
”	Scherzos (Debussy)	Durand
”	Deuxieme Scherzo	Augener
”	Mazurkas (Scholtz)	Peters
”	Valses, Mazurkas (井口基成)	春秋社
”	Scherzos	”
”	世界音楽全集 1 (高折宮次)	”
”	Scherzi (Leonid Kreutzer)	龍吟社
”	ピアノアルバム (田中希代子)	全音出版社
”	世界音楽全集 18	音楽之反社
		(1963)
		(1965)
		(1930)
		(1943)
		(1964)
		(1955)

Chopin 世界音楽全集 19	音楽之友社	(1956)
〃 〃 22	〃	(1958)
○ 生誕 150 年ワルシャワ, ショパン協力編纂 レコード, 解説 1~5		(1960)
○ Frederic Chopin Exposition du Centenaire Paris Bibliotheque Nationale		(1949)
○ 南葵音楽文庫 特別公開カタログ 読売新聞・音楽学会		(1967)
○ ピアノの楽聖 大ショパン展 カタログ 毎日新聞・日本ショパン協会		(1970)
「ショパン」	ヤロスワフ・イワジュキエフィッチ著 佐野司朗訳	音楽之友社 (1968)
「ショパン」	コルトー著 河上徹太郎訳	新潮社 (1972)
「ショパンの手紙」	アーサー・ヘドレイ編 小松雄一郎訳	白水社 (1965)
「フレデリック・ショパン」	フレデリック・ニークス著 田部 節訳	全音楽選出版部 (1967)
「ショパンその人間と音楽」	アラン・ウォーカー編 和田 旦訳	白水社 (1968)
「ショパンの芸術」	ジェームズ・ハネカー著 鈴木賢之進訳	十字屋楽器店 (1924)
音楽学	13 音楽学会編	音楽之友社 (1968)
〃	16 〃	〃 (1971)

注(1) Bibliothèque Nationale, Département de la Musique は旧館の筋向いに設けられた別館にあり, 比較的新しい。閲覧室は五階にあり明るい気持のよい室である。或時, マイクロフィルムを見るために, ここの中二階の室に案内された。片方は壁, もう一方は厚いガラスで隣の室としきられている。音は殆どきこえないが, ピアノとフルートと合奏して笑ったり, むつかしい顔をして考えこんだりしているのが眺められた。ここにはアプライトピアノを入れた室が二つあり, ピアノの上の注意書きには「テクニックの練習のために使用することを禁ずる。」とあった。つまり学問的に音をさぐることに用いるためらしい。日本の図書館では考えられない羨しいことである。ここでは時折, セミナールが開かれるようである。

(2) Julian Fontana ショパンと同年の生れ。砲兵中尉。友人というよりショパンの女房役であったようだ。ショパンからの手紙が沢山残っている。写譜を進めてほしいとの手紙(1841年11月1日付ノアンより)もあるように, いつも彼から写譜を依頼されていたようである。ショパンの死後, 作品の出版を企てた。幻想即興曲の名付け親はフォンタナであり, 地下でショパンは苦笑していることであろう。

(3) Arther Hedley ヨーロッパでは一流のショパン研究学者。ショパンに関するコレクターとしても有名である。ロンドンに住む。1949年以降, ショパンコンクールの審査副委員長。大音楽家双書の「ショパン」の著者であり, ショパン書簡選集の編者でもある。

(4) Alfred Cortot 二十世紀前半に現われた最大のピアニストの一人である。戦前からレコードを通してわが国でもひろく親まれていた。1952年来日し, とくにショパンの作品の演奏は忘れがたいものであった。彼は指揮者としても活躍し, また, 1905年にチェロのカザルス, ヴァイオリンのティボーと三重奏団を結成し以後25年間, 室内楽演奏の発達に貢献した。1917年パリ音楽院の教授になったが, 間もなく学校当局と意見が合わず辞任し, 1919年エコール・ノルマル・ド・ミュージックを創立, 院長となった。彼のピアノの解釈の講座は, その演奏におとらず, すばらしいものであったという。コルトーは1936年, ロンドンでショパンの書いたピアノの手引書の原稿を買い求めることが出来た。十二葉ほどのいろいろな紙にかかれた判読しがたいものであった。コルトーがピアニストの眼をとおして書いた「ショパン」は音楽学者の著書とは違った面で興味深いものである。

(5) Carl Mikuli (1819—1897) はじめウィーンで医学の勉強をしていたが, 1844年パリに移り, 1848年までショパンのもとで学んだ。音楽教育に一生を捧げ, ショパンに関する手記を残した。ショパンの楽譜の校訂とともに, ショパンの奏法を知る手がかりとして貴重な価値をもつものである。

(6) Leopold Godowsky (1870—1938) Soshly (ロシア領ポーランド現リトアニア)で生れる。アントン・ルービンシティン時代以後の偉大なピアノの巨匠の一人である。1879年デビュー, 1891年アメリカに帰化する。1895年シカゴ音楽院教授。1900年よりベルリンに住む。1909年ウィーン王立音楽アカデミーのピアノ科主任。その後世界各国に演奏・教育旅行をした。1922年秋日本を訪れ帝劇で公演している。多くのピアノ曲の作品もあり, 中でもショパンの練習曲の編曲(50 Chopin—Studien)は有名である。ゴドフスキーは, 批評家たちから「テクニックの魔術師」といわれていた。ソ連音楽界の長老ネイガウスの先生である。つまり, リフテルとギレルスは孫弟子にあたる。

A Study on the autograph and facsimile of Frederic Chopin

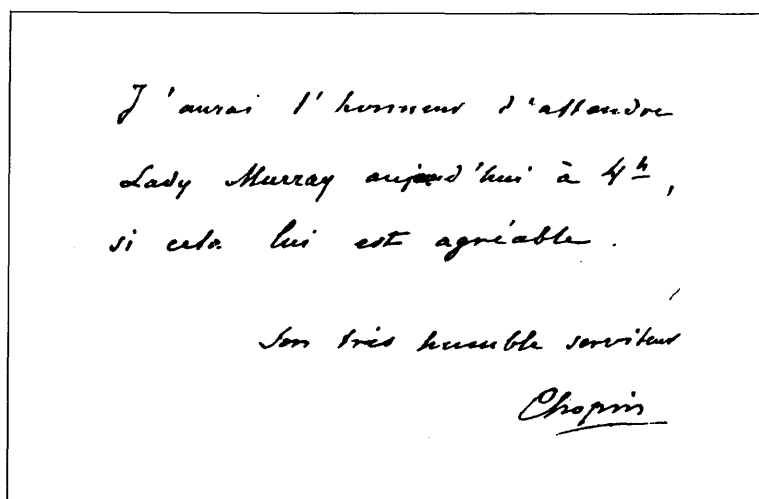
— the materials owned by Bibliothèque du Conservatoire de Musique in Paris, Bibliothèque Nationale, Département de la Musique in Paris and the family of marquis Maeda in Tokyo. —

Tsuneko KAWAGUCHI



〔Fig. I〕 Chopin Mazurka C-dur op. 33 No. 3 筆写楽譜〔J. Fontana〕

前田家所蔵



〔Fig. II〕 ショパンの手紙

前田家所蔵

Valse Op. 64 n° 1

Vivace

Allegro

1ma 2da

fine

allegro al fine

Chopin

〔Fig. III〕 Chopin Valse Des-dur op. 64 No. 1
自筆楽譜〔川口恒子手写〕

The image shows a handwritten musical score for Chopin's Scherzo in B-flat major, Op. 31, bars 332-360. The score is written on four systems of grand staves. It features complex rhythmic patterns, including sixteenth and thirty-second notes, and dynamic markings such as 'p' (piano), 'f' (forte), and 'cresc.' (crescendo). The tempo is marked 'Allegro' at the beginning and 'cresc. ed animato' later in the piece. The handwriting is in black ink on white paper.

[Fig. IV] Chopin Scherzo b-moll op. 31 (Bars 332—360)

自筆楽譜〔川口恒子手写〕

パリ音楽院図書館所蔵